

生物科学学会連合 第16回連絡会議 議事録

日 時 : 2006年5月9日(火) 13:00~15:10

場 所 : (株)メディ・イシュー会議室

東京都文京区湯島 2-31-14 1st ジェネシスビル 5階 (TEL. 03-5805-1901)

出 席 : 大森 正之 (本年度代表, 日本植物生理学会)

浅島 誠 (本年度副代表, 日本動物学会)

城石 俊彦 (日本遺伝学会) 山下 雅道 (日本宇宙生物科学会)

水島 昇 (日本細胞生物学会) 和田 正三 (日本植物学会)

西村 幹夫 (日本植物生理学会) 三中 信宏 (日本進化学会)

小西 真人 (日本生理学会) 片山 舒康 (日本生物教育学会)

川戸 佳 (日本生物物理学会) 武田 洋幸 (日本発生生物学会)

曾我部正博 (日本比較生理生化学会) 朴 民根 (日本比較内分泌学会)

山下 政克 (日本免疫学会) 加藤 憲二 (日本微生物生態学会)

松木 則夫 (日本薬理学会)

オブザーバー: 毛利 秀雄 (日本動物学会), 小林 興 (日本生物教育学会)

(計 16 学会 19 名)

鈴木あい, 福田 博 (事務局)

欠 席 学 会 : 日本解剖学会 日本神経化学会 日本神経科学学会 日本生化学会 日本生態学会
日本分子生物学会

(計 6 学会)

(敬称略, 学会名五十音順)

配 布 資 料 :

- ・ 第15回連絡会議記録(案) (資料1)
- ・ 2005年度決算報告 (資料2)
- ・ 連絡委員名簿(2006年5月2日現在) (資料3)
- ・ 生物科学学会連合の運営に関する申し合わせ事項(最終版) (参考資料)
- ・ 国際生物学オリンピックに関する資料一式

議 長 : 大森 正之

議題に先立ち, 各学会連絡委員より自己紹介がなされた。

今後, 連絡者名簿(資料3)に変更等のある学会は事務局まで連絡していただきたい。

議 題 :

1. 第15回連絡会議記録(案)の確認と承認(資料1)

第15回連絡会議記録(案)が確認され, 承認された。

2. 2005年度決算報告(資料2)

事務局より, 2005年度の収支決算報告がなされ, 承認された。

3. 学会連合の今後の活動について

大森代表より、科研費の配分に対しては、基礎生命科学・基礎生物科学の重要性と存在をアピールすべきではないか、との意見が出された。については、今年中に学会連合から日本学術会議へ向けて、提言文書を出していきたい。

浅島副代表より(日本学術会議副会長として)、第 20 期学術会議においては、学会連合→生物科学分科会→学術会議へと意見が吸い上げられやすいシステムになっているので、各学会が抱える問題や、今後のライフサイエンスのあり方について考えるべき問題があれば、是非意見を出していただきたい。

これを受け、各連絡委員より下記の意見が出された。

- ・ 学校での飼育動物の扱いや、生物実験で使用する実験材料も今後問題とされていくのではないかと危惧している。
- ・ 大きな生体で実験することが多いので、動物実験に関する影響が大きい。
- ・ 最近社会の役に立つ研究として創薬関連の研究が奨励されているが、施設管理が厳しくなってきたり、医学薬学で無い基礎生物学を行っている学部では動物実験に向精神薬が使用できないことになってきた。これは大変困る。
- ・ 宇宙での動物実験に対する国際的な基準を制定するかどうかを検討されており、今年 7 月北京で開催される COSPAR(宇宙科学に関する ICSU の下部組織)の会議での審議事項になっている。
- ・ ①日本植物生理学会は 2 年前に、ケース転換作物について宣言を出しており、植物関連学会からも賛同をいただいた。しかし、実際栽培しようとする規制がかかる。学会連合で早急に取り上げてもらいたい。②科研費の基盤研究が伸びていない。基盤研究を充実させることが重要である。
- ・ ①「科研費で購入した物品を、他の研究で使用してはいけない」等の規制がある。科研費のうち、数十%は次の研究への使用可とする(ある程度科研費を自由に使えるように)等考慮していただきたい。
- ・ ①進化学会は、母体となる学会を別に持ちながら本学会会員になっている研究者が多いため、専門分野(農学・工学等)の応用面へ視野を広げていきたい。②若手研究者やポスドクについても問題認識している。
- ・ ①基礎生物学というフィールドを伸ばすためには、ある種の利益者団体として主張していかなくてはならないのではないかと。②ポスドク問題が深刻化している。
- ・ ①公務員試験では、理系が農学系と比べても不利という現状が変わっていないのではないかと。②提言提出においては、学会連合の存在は必要不可欠である。③国は、我が国からの、特に科学情報発信を推奨しながら、これに向けて歯を食いしばって頑張っている ISI ランクの小ジャーナルをサポートしない現状がある。学会連合には、情報発信をしようとしている小規模学会のサポートを是非していただきたい。
- ・ ①科研費の目的外使用が厳しい。(過年度支出の問題等)。②基盤 C クラスの採択率が低いので、配分を考慮していただきたい。
- ・ 各応用分野からも基礎研究だと訴える内容が多くなり、基礎生物学とはどのようなものを指すのかハッキリした言葉で説明できるようにする必要がある。
- ・ ①実験動物の問題。②科研費の基盤研究については、一度だけでなく、度重ねて提言していかなくてはならないのではないかと。
- ・ 学会の法人化について検討している。

- ・ ①学会連合は、提言するための実行力を持たなければならない。②実験動物の輸入が規制される前に提言していくのが重要なのではないか。

4. 国際生物学オリンピックについて(資料有)

オブザーバー:毛利先生(日本動物学会),小林先生(日本生物教育学会)より,国際生物学オリンピック(以下,IBO)および国際生物学オリンピック日本委員会(以下,JBO)の紹介がなされた。

- 第17回国際生物学オリンピックは,2006年7月にアルゼンチンでおこなわれる。(日本は昨年度から参加)
- 今年度は,SSH(Super Science Highschool)に参加者を限定せず,選考試験がおこなわれた。(中学3年から参加可能)。会場は大学のキャンパスを利用した。
- IBOは,HP等を通して高校教師等に呼びかけ,問題作成をおこなった。

なお,IBOについて,下記の意見が出された。

- 日本の生物学を担っていく後継者を育成するためにはこのような企画は必要ではないか。
- 中学・高校の生物教育が専門教師の不足等で問題視されている中,IBOが中高生の生物教育にプラスに働くのであれば,学会連合としても協力する方向で良いのではないか。

<学会連合としての後援等について>

- ・ 学会連合に金銭的な負担をかけないことを原則としていただきたい。
- ・ 各学会が個別に後援に名を連ねるのは問題ない。
- ・ 学会連合が後援に名を連ねるかは,今年の夏までにはメール等で承認可否を問う予定である。

5. その他

次の連絡会議は,11月に開催される予定である。

(文責:生科連事務局)